

愛知県立吉良高等学校の取組（地理歴史科，公民科）

－「本質的な問い」に基づくパフォーマンス課題を通して－

1 はじめに

本校は、愛知県西尾市南部に位置する普通科と生活文化科の併置校である。昭和39年に家政科単独校として創立し、昭和60年に普通科が新設された。卒業後の進路については、約7割の生徒が、大学・短大・専門学校に進学、残りの3割の生徒が就職である。生徒の多くはのどかで穏やかな環境に育ち、明るく素直な生徒が多い。しかし、のどかな環境にあるせいか、主体的に行動を起こすことが苦手であり、他人の意見に流されやすく、周りの様子をうかがいながら行動する傾向にある。自ら決断し行動できるたくましい生徒を育成することは、本校の長年にわたる課題である。

2 研究の目的

昨年度、吉良高校では、「解決に向けて自ら課題に取り組む自主性」「他人に流されない自律心」を育てることを目標に、第2学年の「倫理」において数々のパフォーマンス課題に取り組んだ。この実践の成果は、自ら課題に取り組む自主性の芽生えが確認できたことである。生徒が、班別学習で役割分担を自主的に行い責任を全うしようとする様子や、教科書に載っていない思想家を自主的に調べてきた班が現れる等、生徒の自主性が育ってきていることを感じられる場面が数多く見られるようになった。

本年度は、実践を地理歴史科にも拡大し、第1学年の「日本史A」、第2学年の「倫理」、第3学年の「政治・経済」と、全ての学年で取り組むことにした。それはある学年だけで取り組むのではなく、学年全体を通して同じ目標で実践した方が、効果が大きいと考えたからである。そこで、地理歴史科・公民科においては、3年間を通して育てたい「目標とする人間像」を設定し、それをより具体化した「学年目標」を設定した。また、この「学年目標」を意識しながら各単元のねらいを定め、それを「単元の目標」とした。単元のねらいを実現するためのパフォーマンス課題とルーブリックの作成とその評価方法について検討することを目的として研究を進めた。

3 研究の方法

(1) 「目標とする人間像」と「学年目標」の設定（資料1）

本年度、全ての学年で実践するに当たって、地理歴史科・公民科として「目標とする人間像」を設定した。本校の生徒の実情は、明るく素直であるが、主体的に行動を起こすことが苦手であり、他人の意見に流されやすく、周りの様子をうかがいながら行動する傾向にある。

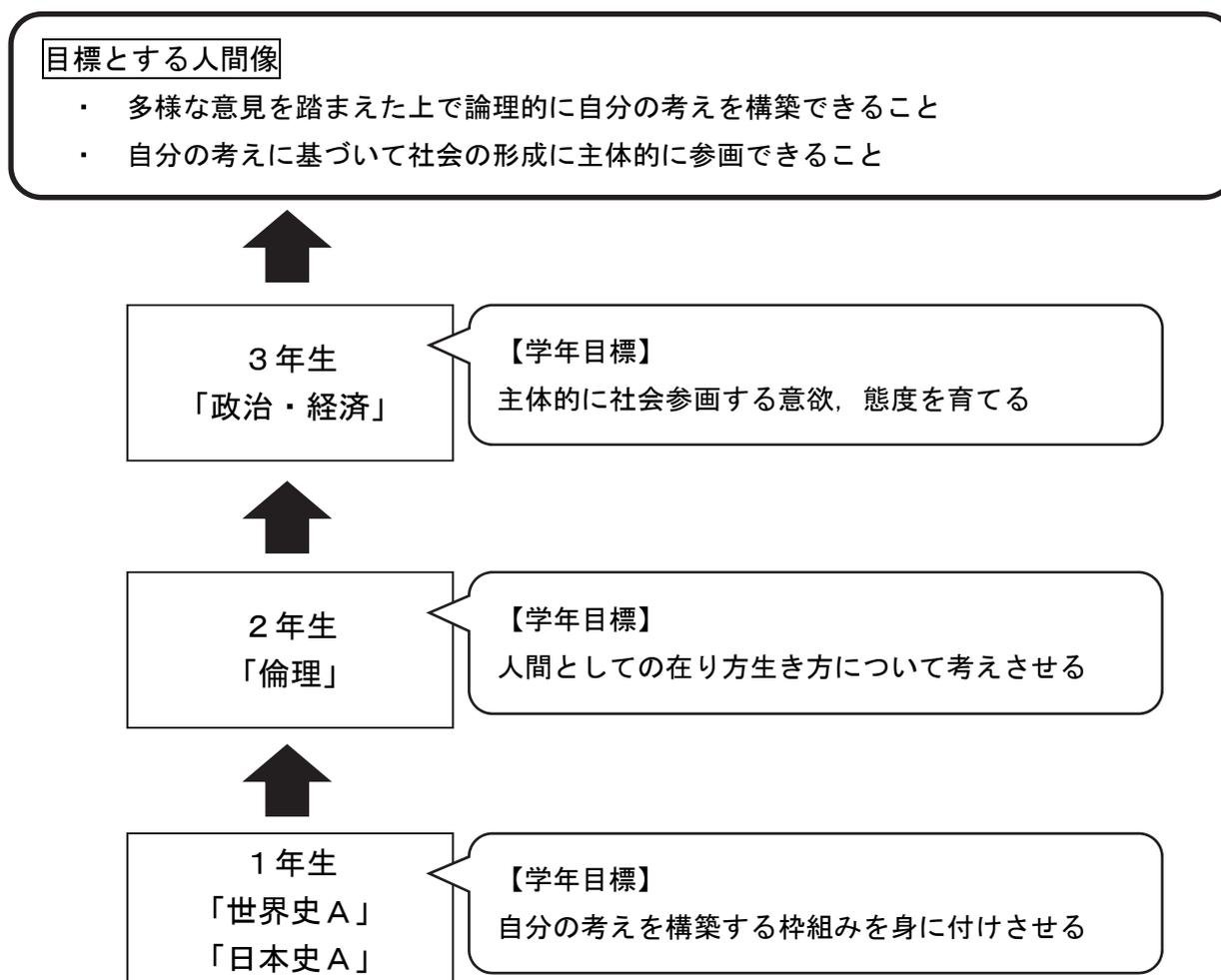
こうした実情や社会からの要請を踏まえて「目標とする人間像」を、以下のとおりとした。

- ・ 多様な意見を踏まえた上で論理的に自分の考えを構築できること
- ・ 自分の考えに基づいて社会の形成に主体的に参画できること

また、この「目標とする人間像」を具体化した各学年の「学年目標」は、以下のとおりである。

- ・ 第1学年：自分の考えを構築する枠組みを身に付けさせる（「日本史A」「世界史A」）
- ・ 第2学年：人間としての在り方生き方について考えさせる（「倫理」）
- ・ 第3学年：主体的に社会参画する意欲・態度を育てる（「政治・経済」）

【資料1 「目標とする人間像」と「学年目標」の概念図】



(2) 各単元での実践

各単元を構想する段階で、「学年目標」を意識して単元のねらいを定めるとともに、そのねらいを実現するために単元を通して考えさせたい「本質的な問い」を設定した。また、大きな単元の場合は、各小単元において、この「本質的な問い」に関連付けた「小さな問い」を続けて設定することで、生徒が「本質的な問い」に少しずつ近づいていけるように単元を構成する工夫を行った。

生徒には、各単元または各小単元の当初において単元の見通しを示し、主に班別学習を通じて学習を進め、各単元または各小単元の終末においてパフォーマンス課題に取り組ませ、個々の学習成果の表出を試みた。班別学習やパフォーマンス課題への取組状況については、ワークシートにおいて自己評価及び感想等を記述させることによって振り返る機会を設けた。また、生徒のパフォーマンスを評価するルーブリックにおいては、これまでの授業や定期考査では十分に測定することが難しかった【思考・判断・表現】等の観点からも評価できるよう課題を工夫した。

この他の取組として、生徒にパフォーマンス課題に取り組む基礎を身に付けさせるために、第1学年の「日本史A」、第2学年の「倫理」を中心に、作文、討議、調査・発表等を取り入れた学習を事前に実施した。

なお、単元の構想及び研究授業の詳細については、事前の校内委員会等で協議するとともに、顧問の愛知教育大学の土屋武志教授に御指導を仰いだ。さらなる協議が必要な場合は、メール等を通して、総合教育センター所員との間で意見を交換した。

校内委員会等の日程及び内容等については、次のとおりである。

<校内委員会等について>

- 第1回校内委員会 平成27年4月27日(月), 会場:本校
 - ・出席者 総合教育センター研究部長, 総合教育センター所員3名, 本校校長, 本校教頭1名, 本校研究員3名
 - ・内容 今年度の研究計画について
- 顧問との打ち合わせ 平成27年7月2日(木), 会場:愛知教育大学附属名古屋小学校
 - ・出席者 土屋武志教授(愛知教育大学), 総合教育センター所員1名, 本校研究員1名
 - ・内容 第1回研究授業の単元構想の検討について
- 訪問調査 平成27年7月16日(木), 会場:大阪教育大学附属高等学校池田校舎
 - ・出席者 大阪教育大学附属高等学校池田校舎教諭2名, 総合教育センター所員1名, 本校研究員1名
 - ・内容 大阪教育大学附属高等学校池田校舎の取組について
- 第2回校内委員会 平成27年9月17日(木), 会場:本校
 - ・出席者 総合教育センター所員1名, 本校教頭1名, 本校研究員3名
 - ・内容 第1回研究授業の学習指導案の検討と今後の研究計画について
- 第3回校内委員会 平成27年9月30日(水), 会場:本校
 - ・出席者 富山県立高岡南高等学校教諭1名, 本校校長, 本校教頭1名, 本校研究員3名
 - ・内容 授業参観, 本校の取組についての説明
- 第4回校内委員会 平成27年10月5日(月), 会場:本校
 - ・出席者 土屋武志教授(愛知教育大学), 柴田好章教授(名古屋大学), 石川県教育委員会学校指導課指導主事1名, 石川県立金沢錦丘高等学校教諭1名, 石川県立金沢泉丘高等学校教諭1名, 愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事1名, 総合教育センター所員4名, 本校校長, 本校教頭1名, 本校研究員3名
 - ・内容 第1回研究授業及び研究協議
- 第5回校内委員会 平成27年10月30日(金), 会場:本校
 - ・出席者 石川県立小松工業高等学校教諭1名, 本校校長, 本校教頭1名, 本校研究員3名
 - ・内容 授業参観, 本校の取組についての説明
- 第6回校内委員会 平成27年11月11日(水), 会場:本校
 - ・出席者 土屋武志教授(愛知教育大学), 高綱睦美講師(愛知教育大学), 愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事1名, 総合教育センター所員4名, 県立高等学校長はじめ高等学校教員57名, 本校校長, 本校教頭1名, 本校研究員3名, 本校教諭及び講師2名
 - ・内容 第2回研究授業及び研究協議(研究発表会)
- 第7回校内委員会 平成27年11月17日(火), 会場:本校
 - ・出席者 総合教育センター所員1名, 本校教頭1名, 本校研究員3名
 - ・内容 総合教育センター発表会についての打ち合わせ及び研究報告書について

4 研究の実際

(1) 第1学年における実践

ア 概要

歴史的事象に対する「概念的知識」を身に付けさせることが、第1学年における研究実践のねらいである。「概念的知識」とは、北俊夫(2012)によると、授業で得られた、社会的事象を言い表した「具体

的知識」を活用することで獲得される、ものの見方、考え方につながる知識のことである。これは教科における第1学年の目標である「自分の考えを構築する枠組み」の形成にもつながると考える。

実践は、学習指導要領大項目2(2)ウ「近代の追究」においてパフォーマンス課題を実施し、生徒の達成度について、それぞれルーブリックに基づいて評価した。単元名は「日本の近代化」とした。

実践に当たっては、単元のねらいと単元構成及びパフォーマンス課題とそのルーブリックにずれが生じないように、単元のねらいを明確にするように努めた。単元のねらいを設定するに当たっては、「日本の近代化」という単元についての「本質的な問い」を考えることから始めた。「本質的な問い」とは、西岡加名恵(2008)によると、単元を通して生徒が思考を深化させていくために設定する問いのことで、多面的・多角的な思考のきっかけになり、なおかつ単元の本質にせまり、生徒の価値観を揺さぶるような問いのことである。

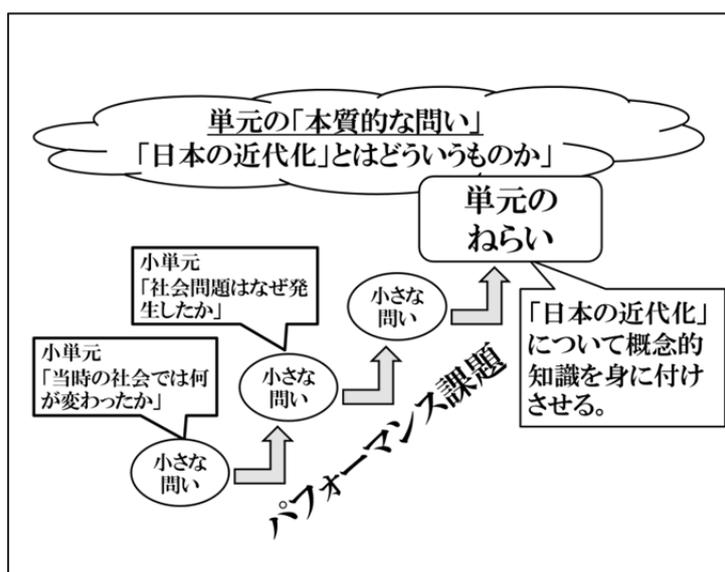
『日本の近代化』とはどういうものか」という問いを、本単元における「本質的な問い」に設定し、その追究を通して『日本の近代化』について『概念的知識』を身に付けさせる」ことを、単元のねらいとした。「本質的な問い」を追究させることで、教科書や調べ学習で得られた「具体的知識」を「概念的知識」へと高め、生徒に身に付けさせることができると考える。

この「本質的な問い」を段階的に追究するために、本質的な問いに関連する「小さな問い」及びそれに対応する小単元を設けた。「小さな問い」について考察するパフォーマンス課題に取り組みせることで「本質的な問い」を追究し、段階的に単元のねらいに近づけていく構想である。小単元の授業計画も、「小さな問い」に対する生徒のパフォーマンス課題を中心にして設計した。

一つ目の小単元では「当時の社会では、何が変わったか」という「小さな問い」を設定し、近代化遺産について考察することで、「社会の変化」という側面から「日本の近代化」を追究させることにした。二つ目の小単元では、「社会問題はなぜ発生したのか」という「小さな問い」を設定し、当時起きた社会問題を学習することで、「日本の近代化」を追究させることにした。

今回の実践では、この二つの段階を設定したが、単元の更に先の部分においても「小さな問い」を設定し、「日本の近代化」を追究させる場面を用意していくとともに、生徒自身が主体的に「本質的な問い」の追究が続けていけるようになることが期待される(資料2)。

【資料2 単元構想の概念図】



イ 授業実践①「近代化遺産から見る社会の変化」の展開

(ア) 単元構想及び学習指導案

近代化によって、「当時の社会では何が変わったか」という「小さな問い」を追究する教材として、日本の近代化に貢献したと考えられる集成館、長崎造船所、高島炭鉱、八幡製鉄所、富岡製糸場の5つの近代化遺産について取り上げた。生徒に主に調べ学習と班別学習を行わせ、近代化遺産についての発表パネルとそれを説明する原稿を作成させ、発表させた。そして、パネル、発表の内容に基づいたナレーション原稿を書かせ、それをルーブリックに基づき評価した。

以下に学習指導案を記す。

1 教科・科目	地理歴史科・日本史A												
2-1 単元名	日本の近代化												
2-2 小単元名	近代化遺産から見る社会の変化												
3 小単元の目標	集成館、富岡製糸場、三菱長崎造船所、高島炭鉱、八幡製鉄所の近代化遺産を資料として活用し、当時の社会の変化について理解させる。												
4 小単元の指導計画（全5時間）	<table border="1"> <thead> <tr> <th>配当時間</th> <th>指導内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>夏季課題</td> <td>○5つの近代化遺産について調べる。 ・集成館、富岡製糸場、三菱長崎造船所、高島炭鉱、八幡製鉄所のうち1つについて調べ、ワークシートを完成させる。</td> </tr> <tr> <td>1次（1時間）</td> <td>○パフォーマンス課題の提示と班づくり ・夏季課題で調べた内容を基に、班分けをさせる。 ・夏季課題の成果を班内で発表させる。 ・班で作成するパネル資料の内容と構成を協議させる。</td> </tr> <tr> <td>2次（1時間）</td> <td>○近代化遺産の調査 ・班の協議の内容を基に近代化遺産について調査させる。 （図書室・情報処理室を利用）</td> </tr> <tr> <td>3次（2時間）</td> <td>○パネル資料とナレーション原稿の作成 ・前時の調査内容に基づいてパネル資料とナレーション原稿を作成させる。 （図書室・情報処理室を利用）</td> </tr> <tr> <td>4次（1時間） ※本時</td> <td>○発表とパフォーマンス課題（資料3） ・パネル資料を掲げ、ナレーション原稿に基づいて発表させる。 ・発表に対する質疑応答をさせ、さらに質問、感想、疑問点等を付箋紙に書いてパネルに貼らせる。 ・発表や感想、疑問点を踏まえて、班別協議をさせる。 【パフォーマンス課題】 ・もう一度ナレーション原稿を生徒それぞれに書かせる。</td> </tr> </tbody> </table>	配当時間	指導内容	夏季課題	○5つの近代化遺産について調べる。 ・集成館、富岡製糸場、三菱長崎造船所、高島炭鉱、八幡製鉄所のうち1つについて調べ、ワークシートを完成させる。	1次（1時間）	○パフォーマンス課題の提示と班づくり ・夏季課題で調べた内容を基に、班分けをさせる。 ・夏季課題の成果を班内で発表させる。 ・班で作成するパネル資料の内容と構成を協議させる。	2次（1時間）	○近代化遺産の調査 ・班の協議の内容を基に近代化遺産について調査させる。 （図書室・情報処理室を利用）	3次（2時間）	○パネル資料とナレーション原稿の作成 ・前時の調査内容に基づいてパネル資料とナレーション原稿を作成させる。 （図書室・情報処理室を利用）	4次（1時間） ※本時	○発表とパフォーマンス課題（資料3） ・パネル資料を掲げ、ナレーション原稿に基づいて発表させる。 ・発表に対する質疑応答をさせ、さらに質問、感想、疑問点等を付箋紙に書いてパネルに貼らせる。 ・発表や感想、疑問点を踏まえて、班別協議をさせる。 【パフォーマンス課題】 ・もう一度ナレーション原稿を生徒それぞれに書かせる。
配当時間	指導内容												
夏季課題	○5つの近代化遺産について調べる。 ・集成館、富岡製糸場、三菱長崎造船所、高島炭鉱、八幡製鉄所のうち1つについて調べ、ワークシートを完成させる。												
1次（1時間）	○パフォーマンス課題の提示と班づくり ・夏季課題で調べた内容を基に、班分けをさせる。 ・夏季課題の成果を班内で発表させる。 ・班で作成するパネル資料の内容と構成を協議させる。												
2次（1時間）	○近代化遺産の調査 ・班の協議の内容を基に近代化遺産について調査させる。 （図書室・情報処理室を利用）												
3次（2時間）	○パネル資料とナレーション原稿の作成 ・前時の調査内容に基づいてパネル資料とナレーション原稿を作成させる。 （図書室・情報処理室を利用）												
4次（1時間） ※本時	○発表とパフォーマンス課題（資料3） ・パネル資料を掲げ、ナレーション原稿に基づいて発表させる。 ・発表に対する質疑応答をさせ、さらに質問、感想、疑問点等を付箋紙に書いてパネルに貼らせる。 ・発表や感想、疑問点を踏まえて、班別協議をさせる。 【パフォーマンス課題】 ・もう一度ナレーション原稿を生徒それぞれに書かせる。												

5 本時の展開

	学習活動（生徒）	指導上の留意点（教員）	評価の観点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 机を移動し，班をつくる。 発表準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習内容及び本時の活動内容を確認させる。 付箋紙を配付する。 	
展開	<ul style="list-style-type: none"> パネル資料を掲げ，ナレーション原稿に基づいて説明する。 発表に対する質問，感想，疑問点等を付箋紙に記入する。 全ての班の発表終了後，パネル資料を見て回り，コメントを書いた付箋紙をパネルに貼る。 質疑応答の内容や付箋紙のコメントに基いて班別協議を実施し，内容を共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表終了後，発表に対する質疑応答を行わせる。また，終了した班のパネル資料を壁に掲示させる。 	
まとめ	<p>【パフォーマンス課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒それぞれがナレーション原稿をもう一度書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ルーブリックに基づき評価する。 	思考・判断・表現

6 評価手法

(1) 班への課題「学芸員として中学生に説明しよう」

あなたは近代化遺産に併設された資料館の学芸員です。あなたの班は、「日本の近代化と〇〇（近代化遺産の名前）」というパネルを作ることを任せられました。社会科見学に来る中学生にも分かりやすいパネルを作ってください。

(2) パフォーマンス課題「調べた施設の説明原稿を書こう」

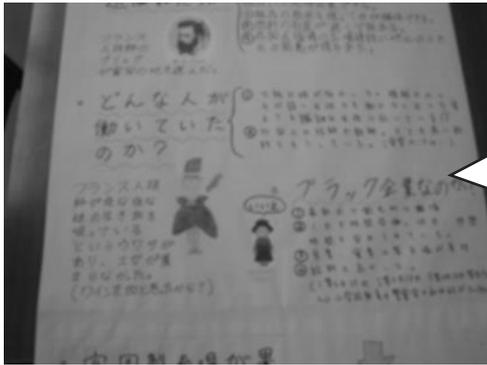
(3) ルーブリック（4次のパフォーマンス課題について評価する）

思考・判断・表現	
A	施設の登場により世の中に起きた変化，発展について，日本の近代化と関連付けて説明しており，なおかつ異なる分野（産業，国際的地位，政治等）にわたり関連が説明されている。
B	施設の登場により世の中に起きた変化，発展について，日本の近代化と関連付けて説明している。
C	施設の登場により起きた変化，発展について，日本の近代化と関連付けて説明できていない。



1次の活動の様子

- ①パフォーマンス課題とルーブリックを生徒に提示し，これからの学習について説明した。
- ②夏季課題の成果を班内で発表し，これから作成するパネルと説明内容について班で協議した。意見，載せたい項目等を付箋紙に書き，班内で共有した。

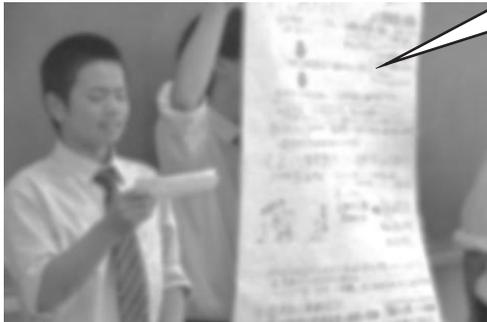


2, 3 次のパネル資料作成

① 2 次：前時の班別協議を基に，図書室の書籍やインターネットを利用して資料を収集した。

② 3 次：収集した資料を基にパネルと説明原稿を制作した。

資料館の学芸員になりきり，クラスの生徒を中学生に見立てて施設の説明をした。



4 次 of 活動の様子

発表後，自由に作品を見て回り，付箋紙に意見，質問を書いて各作品に貼った。



(イ) 評価

小単元の最後である 4 次では，授業で展示パネルに貼られた感想，意見，疑問点等を基に，班別協議をさせた上で，近代化遺産についてのナレーション原稿をもう一度個人で書かせ，それをループリックに基づいて評価した。この課題のねらいは，各近代化遺産の学習を通して，日本の近代化につながる世の中の変化を捉えさせることである。

【資料 3 作品例】

(前略) 富岡製糸場では，労働者を工場に集めて機械を使って物を作る，工場制機械工業が行われています。こうして人々の働き方も，大きく変わりました。技術が進んで，働き方も変わることを，産業革命と言います。富岡製糸場は，日本の産業革命にとっても貢献しました。(中略) 質が良い生糸を大量に生産できて，その生糸を外国に輸出したので，日本は外国のお金をたくさん手に入れることができるようになりました。服もたくさん作れるようになるので，今みたいに若者もおしゃれを楽しむようになりました。大正時代になるとおしゃれな若者はモボ，モガ(これはモダンボーイ，モダンガールを省略した言葉です)と呼ばれました。富岡製糸場はファッションにも貢献したのです。(後略) 【A評価】

資料3は、富岡製糸場について書かれた説明原稿の抜粋である。当時の世の中の変化について、人々の働き方の変化や技術革新の面から捉えられており、富岡製糸場が当時の社会に与えた影響についても、経済、文化といった複数の面から説明ができていた。また、この説明原稿の後には、作品発表の際に寄せられた質問に対する回答がQ&Aスタイルで書かれており、自主的に課題の解決に努力しようとした跡が見られた。この作品のように今回の課題における活動のねらいを的確に捉え、施設から見える当時の社会の変化や施設の与えた影響について説得力のある記述ができていた作品もあったが、活動のねらいをつかむことができずに、自分の所属する班で調べた展示パネルの説明と内容がほぼ変わらない作品も多かった。また、施設から見える当時の社会の変化や施設の与えた影響についての記述はなく、施設自体の説明になってしまった作品も多かった。

(ウ) 個人課題とループリックの修正

C評価の作品が多かった原因は、生徒に活動のねらいを的確に指示できなかったことである。その結果、生徒の活動及び作品が、ねらいから大きく外れたものになってしまった。次の文は、ループリックのA評価の基準である (p.100 6(3)に同じ)。

施設の登場により世の中に起きた変化、発展について、日本の近代化と関連付けて説明しており、なおかつ異なる分野（産業、国際的地位、政治等）にわたり関連が説明されている。

これを生徒に提示し、パフォーマンス課題として、もう一度ナレーション原稿を書かせてみた。作品発表での意見、質問等を踏まえて再度書かせることで学習の深まりが期待できると考えたが、「施設」について考えさせればよいのか、「世の中」について考えさせればよいのかが分かりにくく、班で作成した展示パネルの内容とパフォーマンス課題の作品の内容がほとんど同じものが続出すことになった。そこで、この問題点を踏まえ、パフォーマンス課題の内容とループリックを、次のように作り直した。

◆新たに作り直したパフォーマンス課題

各資料館の説明を参考に、当時の社会の変化についてタイトルを付けて、タイトルの内容について具体的に説明しよう。

◆新たに作り直したループリック

思考・判断・表現	
A	当時の世の中の変化・発展について、時代の背景や他の施設と関連付けて説明できており、内容に適したタイトルを付けている。
B	当時の世の中の変化・発展について、時代の背景や他の施設と関連付けて説明できている。
C	当時の世の中の変化・発展について、時代の背景や他の施設と関連付けて説明できていない。

また、パフォーマンス課題に「各資料館の説明を参考に」という言葉を加え、作品発表で得られた他班の視点を取り入れた思考の展開を図るとともに、自班の発表内容を焼き直しただけの個人作品にならないようにした。さらに、「当時の世の中の変化・発展」という言葉を入れることによって、何について記述すべきかを明確にした。ただし、この時代の変化・発展にはさまざまなものがあるので、生徒の

記述がより具体的になるように、タイトルを付けさせることでどの変化を捉えているかが焦点化されるよう工夫した。

(エ) 授業実践①のまとめと考察

学習に対する生徒の取り組みは熱心であり、とても活発だった。班別学習を通して、学び合いやコミュニケーションの深まりが見られた。また、この実践を通して、主体的に学習に取り組む生徒の意欲も見られた。

課題としては、当初のルーブリックが不明確であったため、生徒が活動のねらいをつかんで、学びを深めることができなかつたことが挙げられる。明確で分かりやすいルーブリックを作成することで、生徒の学習を適切に評価していきたい。

ウ 授業実践②「近代化の進展と社会問題」の展開

(7) 単元構想及び学習指導案

前回の実践で「当時の社会の変化」を捉えさせたことを踏まえて、2回目の授業実践を行った。この小単元では「社会問題はなぜ発生したか」という「小さな問い」を追究させる題材として、明治時代に発生した労働問題、公害問題等の社会問題を取り上げた。明治時代の社会問題については、生徒に主に調べ学習と班別学習を行わせ、発表資料として新聞を班で作成させ3次で発表した。

以下に学習指導案を記す。

1 教科・科目	地理歴史科・日本史A
2-1 単元名	日本の近代化
2-2 小単元名	近代化の進展と社会問題
3 小単元の目標	明治時代の社会問題の要因を、当時の時代背景と関連付けて理解させる。
4 小単元の指導計画（全4時間）	
配当時間	指導内容
1次（1時間）	○小単元での活動内容の提示と班づくり ・小単元の内容を確認させ、班分けをさせる。 ・資料、教科書を参考に、班で作成する新聞に載せる問題を協議させる。
2次（2時間）	○新聞の作成 ・インターネット、図書を用いて取材させる。 ・新聞のレイアウト等を決め、A3サイズ1枚の新聞（資料6）を作成させる。 ・発表の準備として、新聞記事を通して訴えたいことの要点をまとめさせる。
3次（1時間） ※本時	○班別発表とパフォーマンス課題 ・班ごとに「記事を通して伝えたいこと」を述べる。 【パフォーマンス課題】 ・作成した新聞に基づいて生徒一人一人にコラムを書かせる。

5 本時の展開			
	学習活動（生徒）	指導上の留意点（教員）	評価の観点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 机を移動し，班をつくる。 発表準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習時間及び本時の活動内容を確認させる。 	
展開	<ul style="list-style-type: none"> 各班で「記事を通して伝えたいこと」を発表する。 各班の新聞を読み，要点をワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表終了後，質疑応答をさせる。教員のコメントは最小限に控える。 	
まとめ	<p>【個人のパフォーマンス課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各班の新聞を参考にコラムを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ルーブリックに基づき評価する。 	思考・判断・表現

6 評価手法	
(1) パフォーマンス課題 明治時代の社会問題の要因を，それぞれの新聞を参考に説明しよう。(100字～150字)	
(2) ルーブリック	
思考・判断・表現	
A	明治時代の社会問題の要因について，当時の時代背景と具体的に関連付けて記述できている。
B	明治時代の社会問題の要因について，記述できている。
C	明治時代の社会問題の要因について，記述ができていない。



2次：書籍やインターネットを利用して資料を収集し，新聞を作成した。

2次の活動の様子





3次の活動の様子

- ①班ごとに記事で一番伝えたかったことを2分程度で発表した。
- ②授業の最初に、できあがった各班の新聞を全員に配付した。
- ③各班の新聞を読み、要点をワークシートにまとめた。
- ④発表の後で、各班の新聞を参考にパフォーマンス課題のコラムを書かせ、ルーブリックに基づき評価した。

(イ) 評価

3次の導入で、このパフォーマンス課題を実施する旨を伝え、課題が書けるようにしっかりと新聞を読み、発表を聞くよう指示した。ルーブリックについては、A評価の基準を生徒に示した。

生徒の作品2例を次に記す。

【資料4 生徒の作品1】

開国以来、日本は国力強化を急いだ。急激に資本主義化が進んだ日本では、各企業が少しでも多く利益をあげようと倫理的に間違った行動をとることもあった。そのため労働者に対する残酷な罰や過酷な労働環境、公害等が起きるようになった。【A評価】

この作品（資料4）には、社会問題の原因として企業の「利益」重視の姿勢が挙げられ、さらにその原因となった「国力強化と資本主義社会の進展」という時代背景が具体的に記述されているので、A評価とした。また、前回の授業実践のねらいだった「当時の社会の変化」とも結び付けて記述できている。

【資料5 生徒の作品2】

この時代は過酷な労働がありました。雇い主から与えられた仕事やルールに少しでも違反したら、酷罰に処されていた。労働者に自由の権利がなかったのが原因だと思います。今の時代当たり前の権利が、この時代にもあったら良かったのになあと感じました。【B評価】

この作品（資料5）は、自分なりの考えが良く書かれているが、時代背景と具体的に関連付けられていないため、B評価とした。評価の結果は36人中、Aが6人、Bが12人、Cが18人であった。C評価には新聞を抜き書きしただけのものが多かった。

(ウ) 授業実践②のまとめと考察

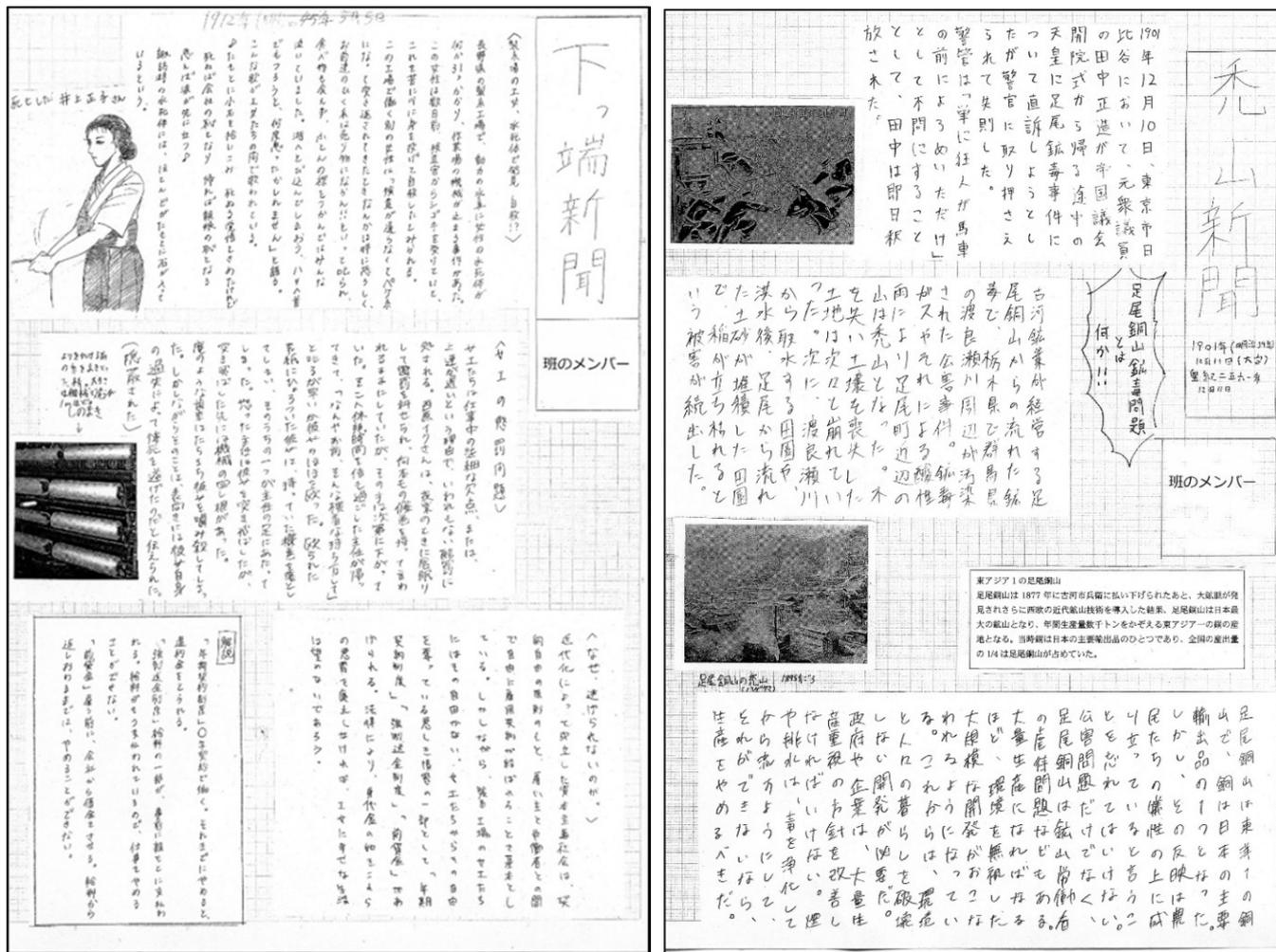
成果の一つ目としては、単元の「本質的な問い」と小単元に連続する「小さな問い」を設定した効果が確認できたことである。生徒が作成した新聞や個人の課題には、授業実践①で学んだ内容が活かされているものも多く見られたことから、それぞれの授業実践で学んだ内容の関連付けがスムーズに進んでいることが確認できた。「小さな問い」を続けて問うことで、それぞれの授業実践で学んだ内容を関連付けて、個別の知識を「概念的知識」へと結び付けられることが分かった。

二つ目は、主体的に学ぶ意欲の高まりが見られたことである。新聞の資料を収集する場面においては、資料を調べる中で新たな疑問が生まれ、自分自身の中に湧き上がった問いに基づいて、さらなる追究を自ら進める生徒も見られた。

三つ目は、「自分の考えを構築する枠組みを身に付けさせる」という第1学年の目標に向けて、能力の伸長が確認できたことである。「B評価」の生徒中には、当時の社会背景と結び付けられていないながらも、根拠を示しながら論を組み立てられるようになってきている生徒も増えてきている。

課題としては、半数の生徒が「評価C」であり、生徒が課題の内容を十分に捉えきれていないことである。今後、課題の内容が十分伝わるよう具体的な手だての工夫が必要だと考える。

【資料6 2次で作成した一部の新聞】



(2) 第2学年における実践

ア 単元構想及び学習指導案

教科における第2学年の目標である「人間としての在り方生き方について考えさせる」ために、男女共同参画社会を題材として取りあげた。学習指導要領(3)現代と倫理イ「現代の諸課題と倫理」において、実践を実施した。単元のねらいは、「男女共同参画社会における在り方生き方を、体験学習での気付きや女性に対する思想に基づき考察させる」ことである。また、「本質的な問い」として、「他者や異性の存在を尊重する社会の形成のためには何をすればよいか」を設定した。

本校では2学期、家庭科と総合的な学習の時間を活用して、普通科第2学年の全生徒を対象に、乳児とその保護者を学校に招いた「赤ちゃんふれあい体験」と近隣の保育園への訪問実習を実施した。2学期に行った本実践では、この体験を事前学習として学んだことを振り返らせ、そこでの気付きを女性問

題の歴史やそれに対する運動、先哲の女性論の学習に生かせるよう工夫した。また、班別学習を通して他者や異性の意見を踏まえさせることで、生徒が視野を広げ思考を深められるようにした。さらに班別学習の成果をポートフォリオとして蓄積し、生徒の考察の進展を記録できるよう工夫した。

評価については、各班の発表や生徒の学習の振り返りに基づいて、「男女共同参画社会においてどのように行動すべきか」についてコラムを書かせ、ルーブリックに基づき評価した。

以下に学習指導案を記す。

1	教科・科目	公民科・倫理
2	単元名	現代の家族とその課題
3	単元の目標	体験学習での気づきや女性に対する思想に基づき、男女共同参画社会における在り方生き方を考察させる。
4	単元の指導計画（全3時間）	
	配当時間	指導内容
	事前学習	<ul style="list-style-type: none"> ・「赤ちゃんふれあい体験」 ・保育園への訪問実習
	1次（1時間）	<ul style="list-style-type: none"> ○事前学習の振り返り ・「赤ちゃんふれあい体験」、保育園訪問実習を振り返り、考えをまとめさせる。 ・体験や実習前後で子どもに対する気持ちに変化があったかどうかを考えさせる。 ・育児や子育てについて、将来自分にできることを考えさせる。 ○事前学習についての学び合い ・班別協議において自分の考えを発表し、意見交換をして班の意見をまとめさせる。 ・班の意見をフリップに記入し、作成させる。
	2次（1時間）	<ul style="list-style-type: none"> ○班別発表 ・前時に作成したフリップを基に発表させる。 ・他班の発表から得た、新たな気づきや考えの変容について記入させる。 ○「今後のあるべき家族形態について」の班別協議 ・女性問題に対する歴史や運動、男女共同参画社会の現状等を基に女性に対する思想の変化を理解させ、班別協議において今後の家族形態について考察させる。 ・班別協議の内容を参考に、過去の思想家の考えと現在の状況を比較し、夫婦の在り方を各自で考えさせる。 ○「夫婦がともに働きやすい社会について」の班別協議 ・先哲の思想、女性に対する歴史や運動、現在の男女共同参画等の状況を踏まえ、夫婦がともに働きやすい社会はどうあるべきか考察させ、班内で意見交換させる。 ・先哲の思想を踏まえ、男女の在り方、夫婦関係で大切にしたいことについて、班で1枚のフリップを作成させる。
	3次（1時間） ※本時	<ul style="list-style-type: none"> ○班別発表 ・前時で作成したフリップを用いて発表させる。 ○班における相互評価 ・他の班の作品を班員で協議し、レーダーチャート（資料7）を用いて評価させる。 【パフォーマンス課題】コラムを書かせて、ルーブリックによって評価する。

5 本時の展開

	学習活動（生徒）	指導上の留意点（教員）	評価の観点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 机を移動して，班をつくる。 発表準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートと評価シートを配付する。 	
展開	<ul style="list-style-type: none"> 自班の作品を発表する。 他の班の意見を聞いて他者や異性の考えを理解し，考察を深める。 他班の作品に対し班別協議し，レーダーチャートを用いて評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表終了後，発表に対する質疑応答をさせる。質疑応答を促し，場合によっては指名する。 他班の発表に対する意見，感想をワークシート（資料8）に記入させる。 	
まとめ	<p>【パフォーマンス課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 男女共同参画社会の形成をテーマとするコラムを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題とともにルーブリックを提示し，ルーブリックに基づき評価する。 ワークシートを回収する。 	思考・判断・表現

※ 事後に教員がポートフォリオ評価として，ワークシートを通して生徒の思考が段階ごとに発展していく様子を確認し，コメントを記入し返却した。

6 評価手法

(1) パフォーマンス課題

あなたは，コラムニストです。男女共同参画にどのように取り組むべきかコラムを作成しよう。

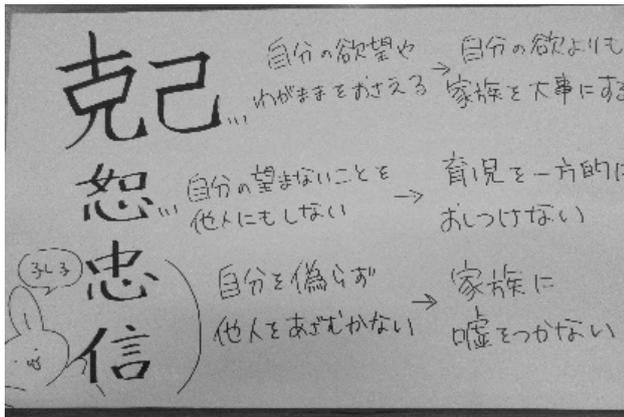
(2) ルーブリック（再提示後）

	思考・判断・表現
A	授業で得た他者や異性の考えによる自分自身の考えの変容や深まり，気付きに触れつつ，先哲の思想と男女共同参画社会の現状を歴史的に考察し導き出した根拠を基に，今後の男女共同参画の在り方を表現している。
B	先哲の思想と男女共同参画社会の現状を歴史的に考察し導き出した根拠を基に，今後の男女共同参画の在り方を表現している。
C	根拠に基づいて表現できていない。



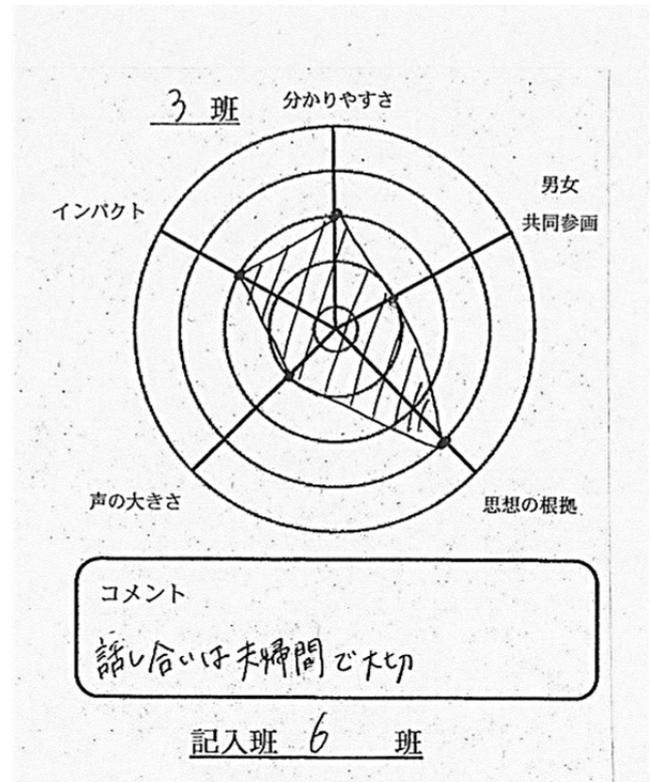
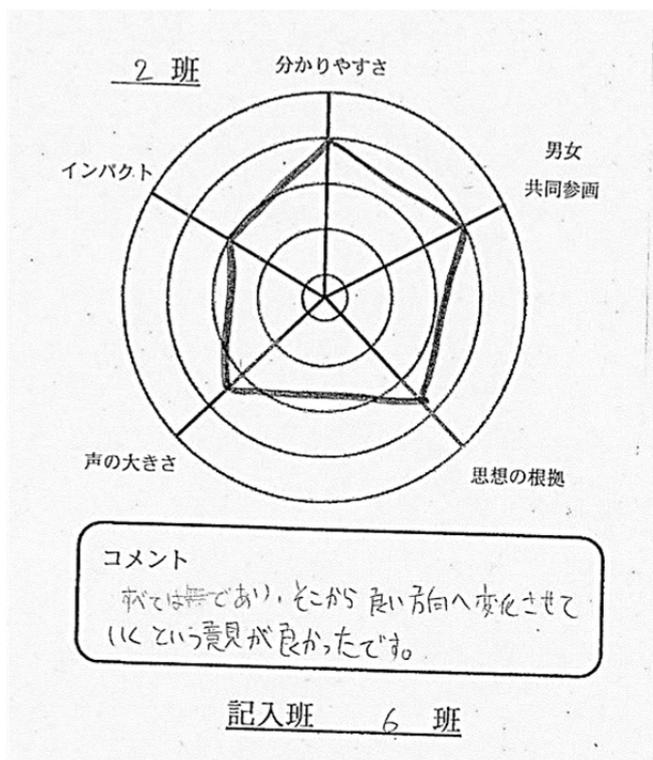
3次の活動の様子

班別に協議し、他班の作品に対し、レーダーチャートを用いて評価した。



班別発表のフリップ

【資料7 班別間評価のレーダーチャート】



【資料9 生徒の作品1】

私は、男女の性差、特に妊娠・出産・授乳という母性に関わる性差があることから、女は子育て、男は仕事、という役割分担は合理的であり、変える必要はないと考えていた。

しかし、「何事でも人々からして欲しいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」というイエス＝キリストの黄金律を引用した班の発表を聞いて、夫婦関係では互いに支えあうことが必要だと考えるようになった。

男女ともに働きやすい環境が近年整備されている。男女共同参画社会基本法はその代表例である。旧来の男女の役割分担に固執しなければならぬ制度的要因は解消されつつある。

一昔前では、平塚らいてうや市川房江などが女性の自立を主張するなど「新しい女」と差別されていたが、これからは男女ともに目線を合わせるが必要になってくるだろう。

夫婦が協力して仕事や家事・育児をしなければならなくなったが、まだ男性の意識は低い。夫婦で支えあうことも大切だが、お互いの時間も確保して、個人と夫婦の二つの生活バランスをとることも大切だと思います。(男子生徒) 【A評価】

この作品(資料9)は、先哲の思想を手がかりに論理的に考察が進められており、なおかつ授業で得られた気付きや他者の意見を踏まえているので、A評価とした。

【資料10 生徒の作品2】

私は初め、男女共同参画社会というものは男女平等が絶対で、仕事、家事、育児を平等に分担して行うべきだと考えていました。でも班での話し合いや他の班の話をして聞いて、男女平等という言葉のとらえ方が変わりました。

男女それぞれに与えられた条件は違うし、育児に関しては、赤ちゃんを産むことは女性しか出来ないということ自体が不平等です。男女どちらも同じことをしましょう、というのは、かえって不自然だと考えるようになりました。4班の「赤ちゃんを産み育てるためには、夫婦がお互いの不平等を認めつつ話し合って、お互いの役割を決めて協力することが大切だ」という意見を聞いて、すごく納得し、共感しました。

私たちの班は女性だけだったので、班の話し合いでは男性の意見を聞くことは出来なかったけど、「男が仕事」の役割がまだ残っている現在の世の中で、家事の負担まで男性に押しつけるのも、不平等です。アメリカの哲学者ロールズは「公正としての正義」を説明するなかで「全メンバーが基本的な自由を平等に分かち合わなければならない」と述べています。夫婦のどちらかに負担が集中することを避け、平等な自由を実現する方法としては、「なんでも半分ずつ」という方法もありますが、役割分担を決めて、全体的に平等になるように調節する方法が効率的だと思います。

夫婦でお互いに認め合って、何でも話し合えるような環境を作り、仲の良い夫婦でいることで、その夫婦にぴったりの平等状態が実現できると思います。また、そのことが子どもにとっても良いことだと思います。貝原益軒の『女大学』に書かれているような性役割も、江戸時代の家族にとって大切なことだったと思いますが、今には今の、新しい役割分担が大切です。就職や育児休暇などで平等が保障された社会の中で、男女がお互いに認め合い協力することで、家族が幸せになれる役割分担を新しく築いていけたらいいな、と思います。(女子生徒) 【A評価】

この作品(資料10)は、先哲の思想、授業で得られた気付きや他者の意見をきっかけに、さらに自身

で思考を深め記述されている。文章の量も多く、課題に取り組む意欲と、自らの考えを表明する積極性の高さもうかがえる。

ウ 実践のまとめと考察

成果の一つ目としては、ポートフォリオという形で班別学習の成果を蓄積したことで、生徒の思考の深まりを可視化できたことである。班別協議を通して、他者や異性の意見をどのように消化しながら取り込んでいるか、授業の学習で得た知識をいかに活用しているかという思考の過程や、生徒の学習でのつまずきもよく分かり、今後の授業の改善に生かせるデータを多数得ることができた。また、パフォーマンス課題の評価においても、生徒のポートフォリオの記述を見ると評価する側の課題の記述の内容についての理解も深まり、単元全体の生徒の活動と一体的な評価ができることが分かった。

二つ目は、生徒の体験活動を事前学習と捉えて振り返りをさせたことで、班別協議や発表、課題の記述等の場面で、自分の体験を下敷きに発表したり、論を組み立てたりする姿が見られ、自分の体験を参考に考えさせることは、生徒の取組を高める上でとても有効であることが分かった。

三つ目は、班別学習の成果物に対する他者評価や個人活動に対する自己評価を行ったが、生徒が学習を振り返り、自分の考えを見直すきっかけになっていることがポートフォリオから確認できたことである。また、教員、生徒がともに単元の目標を再確認することができ、学習の方向性を修正するきっかけにもなることが分かった。

課題としては、A評価が31人、B評価が69人、C評価が19人であり、最初に提示したルーブリックが少し複雑で、生徒がルーブリックの内容を十分に理解できず、期待した成果にたどり着けない生徒がかなりの割合でいたことである。

以下が最初に提示したルーブリックである。

	意思決定	論理的思考力
A	他者や異性の意見を取り入れることによって、男女の在り方や夫婦関係について、自分の意見を発展させ述べることができる。	思想家の考えを理解した上で男女の在り方を歴史的に考察し、その上で他者や異性の考えを考慮し、今後の男女共同参画のあり方を表現することができる。
B	他者や異性の意見を取り入れることによって、男女の在り方や夫婦関係について、自分の意見を述べるができる。	思想家の考えを理解した上で男女の在り方を歴史的に考察し、現在の状況に当てはめ、今後の男女共同参画について表現することができる。
C	自分の考えを主張するだけにとどまっている。	男女の在り方を歴史的に考察できず、自分の考えだけをまとめ、表現している。

授業の目標が十分に絞り込めず、その結果ルーブリックを具体的にすることができなかつた原因であり、授業の目標と評価を明確にしていくことの重要性を再認識できた。評価については、再提示したルーブリックによって行った（再提示したルーブリックは学習指導案に記載）。

実践を終えて、手ごたえを感じたことは、「自分の意見を言うことが楽しかった」「友達の見解は見直すことができ、いい発見につながる」という内容を記入している生徒が多数見られたことである。指示を待っていたり人任せで前に出ることを苦手としていたりする生徒が多い中で、班別学習を重ねることによって生徒の主体性の成長を実感することができた。

(3) 第3学年における実践

ア 単元構想及び学習指導案

教科における第3学年の学年目標である「主体的に社会参画する意欲、態度を育てる」ことを主眼に

おき、主権者教育の一つとして授業実践を行った。学習指導要領(3)「現代社会の諸課題」における課題探究学習と位置付けた実践である。「本質的な問い」としては、「自分の住むまちをよりよくするためには、何をすればよいか」を設定した。主権者教育の生徒用副教材の『私たちが拓く日本の未来』には、主権者として求められる力としては、「根拠を持って、自分の考えを主張し説得する力」が挙げられている。しかし、本校の生徒は他人の意見に流されやすく、討論をさせてもすぐに相手の意見に迎合してしまう傾向がある。自分の意見の根拠を明確にする手だてとしてディベートを使うことにした。賛否に分かれてディベートを行い、自分の意見の根拠を補強したり修正したりしながら自分の論を再構築することで、根拠が明確な自分なりのしっかりした意見にすることができると考えるからである。

自分たちで決めたテーマで、賛否に分かれてディベートを行い、その内容を踏まえ、市長選挙に立候補したと想定して市政の在り方を提案するパフォーマンス課題を書かせ、その課題をループリックに基づき評価するという流れで単元構成を行った。

生徒にはパフォーマンス課題とともにループリックを示し、それに基づく自己評価と教員の評価を比較させることによって、自己評価の修正点について気付かせるとともにループリックの理解が深まるように工夫をした。また、班別学習においては、レーダーチャートを用いて、班で相互に成果物を評価し合い、単元の途中で学習の方向性の修正ができるよう工夫をした。

以下に学習指導案を記す。

1 教科・科目	公民科・政治・経済		
2 単元名	課題探究学習～ディベートを用いた主権者教育～		
3 単元の目標	自分の決めた課題について賛否に分かれディベートを行い、自分の考えの根拠を補強したり、修正したりすることで、その課題に対して根拠が明確な自分なりの意見をもつことができる。		
4 単元の指導計画（全5時間）			
	配当時間	指導内容	
	1次（2時間）	○ディベート準備 ・生徒を4班に分ける。 ・班ごとに、ディベートのテーマを生徒自身に決めさせる。 ・各班でテーマの賛否両面について調べ、模造紙に書き出して整理させる。 ・自分の意見をレーダーチャートを用いて整理しながらまとめさせる。	
	2次（2時間）	○ディベートの実践 ・4つの班それぞれで賛否の二手に分かれてディベートを行う。	
	3次（1時間） ※本時	○パフォーマンス課題 ・ディベートの振り返りをさせる。 ・パフォーマンス課題（資料11）に取り組みせる。 ・各班1名程度発表させて、学びの共有を図る。	
5 本時の展開			
	学習活動（生徒）	指導上の留意点（教員）	評価の観点
導入	・評価シートによって他の班からの評価を分析し、自分の班のディベートの取組を振り返る。	・他の班からの評価の分析を基に、自分の班の振り返りを行い、内容の共有を図るよう指示する。	

展開	<p>【パフォーマンス課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス課題に取り組む。 複数の生徒が自分の考えを表明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題のルーブリックを提示することで課題の方向付けを行う。 机間指導をすることで、生徒の活動状況を捉え、必要に応じてアドバイスをする。ただし、アドバイスをしすぎないように注意する。 各班1名程度で発表させ、学びの共有を図る。 	思考・判断・表現
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 本時の振り返りと自己評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの提出を指示する。 次回の予告をする。 	

※ 事後に教員が評価を行い、ワークシートの返却後に教員評価と自己評価を比較させる場面を設定した。

6 評価手法

(1) パフォーマンス課題

あなたは次回の市長選に立候補します。今日は【あなたが選んだテーマ】についての政策討論会が開催されます。有権者に政策提言を行う演説内容の原稿を作成してください。

(2) 最初に生徒に提示したルーブリック (※括弧内の数字は配点)

	論理的構成力	提案力 (問題解決力)	意志決定力 (自己決定力)
A	自分の考えを論理的に、十分に分かりやすい文章で説明することができる。(2)	市政に対する課題を複数提示し、それぞれの解決策を提案できている。(4)	ディベートを通して再構築した根拠を具体的に示しつつ、表現することができる。(4)
B	自分の考えを論理的に、説明することができる。(1)	市政に対する課題を1つ提示し、解決策を提案できている。(2)	ディベートを通して再構築した根拠を示しつつ、表現することができる。(2)
C	自分の考えを論理的に説明できていない。(0)	市政に対する課題は提示できたが、解決策は提案できていない。(1)	根拠を十分に示すことができないまま、表現している。(1)

(3) 再提示したルーブリック (生徒用 (訂正版)・教師用)

	思考・判断・表現
A	ディベートの取組を通して、他者の意見を踏まえ、自分の意見の根拠を補強したり修正したりした上で、根拠を具体的に示しつつ、自分の意見を構築できている。
B	ディベートの取組を通して、他者の意見を踏まえ、自分の意見を構築できている。
C	根拠に基づいて表現できていない。

ウ 評価

生徒に最初に示したルーブリックは、内容が複雑すぎて、「とても書きにくい」「理解できない」という声が出た。そのためルーブリックを作り直し、再提示を行った。自己評価については、生徒に評価さ

せた後、なぜそのような評価したか理由を書かせた。また、教員の評価を返却する際も、評価の理由のコメントを付けて返却した。評価は次のとおりである。A評価は0人、B評価は25人、C評価は13人であり、教員評価と自己評価が一致したのは38人中21人であった。

以下は、生徒の作品である。

【資料11 生徒の作品】

私が市長に当選したら、原発の建設を認めていきます。現在、日本では原発の停止が進んでいますが、多くの電気を安価で生み出すことができるのは、原発をおいて他にありません。

ここで、みなさんには、安全性について疑問に感じる方もおられると思いますが、原発事故の教訓を生かし、対策をしっかりと立てることで二度と事故のないようにすることはできるのです。

福島で起きた原発事故は地震が直接の原因ではなく、津波による被害で冷却装置が壊れたことによる事故です。ですから、その経験を生かして冷却装置にはしっかりとした対策を施し、いつ津波が来ても大丈夫のようにそなえておけば、このようなことは二度と起こらないでしょう。「備えあれば憂いなし」です。よく取りざたされる「原発のデメリット」「原発の危険性」ですが、今回の事故で明らかになった脆弱な部分を、二度と壊れないような堅牢な物にしておけば、解決できます。また、放射性廃棄物の処分に関わるコストも、発電のコスト安によって打ち消されます。

これほど安全でコストパフォーマンスの優れた発電方式は他にありません。原発の活用は市民のみなさんのみならず、全人類にとって有益なことではないでしょうか。

事故のせいでデメリットばかりに目が向けられていますが、ますます増えるであろうこれからの電力需要を考えると、原発による電気は欠かすことができません。事実、停止した原発の埋め合わせをするために、電気料金は上がり、石油、石炭などの化石燃料の消費は増え、原発よりも遙かにひどい環境負荷を我が市や地球に与えてしまっているのです。

原発の利点を市民の方みんなが理解し、原発建設に向けての大きな動きを、我が市から起こしていこうではありませんか。

この作品(資料11)は、ディベートで扱われた原子力発電所の問題について書かれた政策である。ディベート前は、原子力発電所のメリットを訴えるだけの内容であったが、ディベートの争点であった原子力発電所のデメリットについて、ディベートの内容を踏まえ解決策を提案しようとしている。さらに原子力発電所のメリットについて書き足しながら、原子力発電所の建設の必要性が書くことができている。しかし、根拠の具体性に欠けるので、再提示したルーブリックに基づいた評価は【B評価】とした。

また、同じ生徒の自己評価表は以下のとおりである。

自己評価		教員評価	
評価	評価理由	評価	評価理由
A・B・C	ディベートの時に出た意見を取り入れて自分の意見をまとめることができたのでAにしました。	A・B・C	ディベートの内容を反映できていることはとても素晴らしいと思います。ただし、もう少し理由の根拠が具体的であるとよいと思います。原発の発電費用が他の方法に比べてどれくらい安価なのか、二酸化炭素の排出量が他の方法に比べてどれくらい少ないのか等を調べた資料に基づいて具体的に示せるとさらによいものになると思います。

このように生徒の自己評価に対して、ルーブリックに基づいて、どう改善すれば評価が上がるのかといった視点を具体的にコメントすることで、次の実践に向けての改善点を生徒に具体的に伝えられるようにした。

エ 実践のまとめと考察

成果の一つ目としては、教員評価と自己評価を比較させることによって、作品を作成する際のポイントが生徒に明確に伝わるようになったことである。次の単元で同じように自分の考えを記述させた場合においても、「何を具体的に書けば評価されるか」といった部分を、より明確に捉えていることが分かった。ルーブリックは評価基準表であるので具体性が求められるが、具体的に書こうとすればするほど生徒の幅広いパフォーマンスを捉えきれないという問題点も昨年度から見えていた。提示するだけではなかなか伝わらないルーブリックの内容を伝える手だてとしては有効であると考えた。

二つ目は、ディベートが自分の意見の根拠を明確にする手だてとして有効であることが確認できたことである。資料 11 の作品は、ディベート前は、原子力発電所のメリットだけが書かれていたものだったが、ディベートを通してデメリットに対する反論とさらにメリットが書き足されて、説得力のある文章になった。これは主権者教育として必要とされる「根拠を持って、自分の考えを主張し説得する力」の育成にもつながったと考える。

課題の一つ目として、生徒にいろいろなことを身に付けさせたいと思うばかりに、ねらいが絞り切れず最初に提示したルーブリックがとても複雑になってしまったことである。一つの授業や単元にいろいろなねらいを入れると、生徒はねらいを捉えきれず学習の方向性がぶれてしまう。学習のねらいを焦点化することが、ルーブリックを具体化することにもつながるので、授業や単元の目標を明確にすることはとても重要だと感じた。

二つ目は、具体的な根拠が示されていない作品がほとんどであり、A評価を付けられなかったことである。資料等から導き出した具体的な根拠に基づき論を立てる指導がふだんからできていなかったことが明らかになった。説得力のある意見にするためには、具体的な根拠に基づいている必要があり、日常から論理的に思考させることが大切であると気付いた。また、課題に取り組む前に生徒に明確な指示を出しておくことが必要だったと感じた。

5 成果と課題

(1) 成果

一つ目は、目標を設定し生徒に実践を積み重ねさせることの重要性が明らかになったことである。2年間実践を積み重ねた現3年生の課題への取組を見ると、1、2年生に比べて「目標とする人間像」に向かって顕著な成長が確認できた。また、単元に「本質的な問い」を設定して、その問いの追究のために生徒が実践を積み重ねることで、より本質的なものを生徒が追究することができ、ものの見方・考え方が豊かになることにつながった。

二つ目は、チームで取り組むことの意義が共有できたことである。地理歴史科、公民科の教員間で「目標とする人間像」を一緒に考え共有することで、教科が一体となりまとまりのある効果的な指導を可能とした。また、評価の信頼性を高めるためには、目標を共有し互いに評価し合いルーブリックの改善点を浮かび上がらせたことは、とても効果があった。さらに、研究授業をお互いに参観しアドバイスをしながら授業改善に取り組むことができた。このような動きが地理歴史科、公民科を超えて他の教科でも授業改善の動きが出てきていることは、この取組の大きな成果とすることができる。

三つ目は、「指導と評価の一体化」を進める意義を理解できたことである。単元のねらいを立て、そ

の達成状況を評価することは、生徒の学びの深まりを測る上で重要であるが、教員自身はその後の授業の手だて等を見直し、授業改善をしていく上でとても大切であると考えようになった。

四つ目は、多様な観点から評価を行う意義が確認できたことである。これまで地理歴史科、公民科においては、「知識・理解」の観点からの評価が中心であった。しかし、教員同士が「育てたい人間像」について考えていく中で、「理想とする人間像」を思い浮かべると、知識や技能の習得だけでなく、思考力・判断力・表現力や主体性等の育成も重要な要素であることが見えてきた。それゆえに「思考・判断・表現」などの観点からの評価はとても大切であり、それらの観点からの評価には、パフォーマンス課題による評価が有効であることが分かった。

(2) 課題

一つ目は、単元を構想する際、単元のねらいの具体化を徹底することが必要である。単元のねらいが具体的でないと授業構成や生徒の学習活動がぶれてしまい、学習目標に生徒が到達できなくなってしまう。また、ルーブリックも曖昧なものになってしまう。例えば、第3学年の実践では、目標とする生徒の作品の最終形を頭に思い浮かべながら、単元構想をするとよかった。それができていれば生徒の活動を単元のねらいに沿って方向付けすることができたと思う。

二つ目は、効果的なパフォーマンス課題を効率的に作成する方法を検討することである。準備と評価に時間と負担のかかるパフォーマンス課題ばかりでは継続的な実践が難しくなる。授業で身に付けた知識を活用する場面や思考力を働かせる場面を一つの授業に5分でも10分でも入れていく方法を探るなど、ふだんの授業にスムーズに取り入れられるようなパフォーマンス課題の開発を検討していかなくてはならないと考える。

三つ目は、評価の信頼性・妥当性を向上させ、評定への算入を検討していくことである。多様な観点からの評価手法を研究したが、パフォーマンス課題という評価の場面を設定すること、そこで表出される生徒の活動をルーブリックによっていかに評価するかという視点に研究が偏ってしまったが、今後実践を積み重ねる中で、評価の信頼性・妥当性の高まりが確認できれば、評定への効果的な算入を検討していかなくてはならないと考える。

6 おわりに

研究に取り組むに当たって、地理歴史科、公民科においては、当初生徒のパフォーマンスを表出させる、ディベート、班別協議、調べ学習、発表などの場面を設定することは難しいことではなかった。実践に取り組んでみると、当初は生徒に活動させることが目的になってしまい、研究が行き詰まったこともあった。しかし、実践を繰り返す中で、単元の目標を明確にして生徒がその目標を達成できるように単元構成をしていくことの重要性に気付くことができた。

単元を構成するには、教材研究にしっかりと取り組み、教材の本質を捉える必要がある。さらに教材の本質を生徒が捉え、生徒自身はその社会事象に対して自分なりのものの見方・考え方をもつことができるようにしていく必要がある。大変労力がかかるが、教材研究を通して知識を構造化することもでき、また教える内容も精選することができる。改めて教材研究の大切さに気付くことができた。

研究実践を進める中で、顧問である土屋武志教授をはじめ総合教育センターの先生や多くの先生方から、有意義な指摘を数多く頂いたが、その指摘に対して、一つ一つ考え答えを出していくことで、生徒の学びを深めることのできる授業に少しずつ近づけることができたと思う。

本校の地理歴史科、公民科においては、「多様な意見を踏まえた上で論理的に自分の考えを構築すること」「自分の考えに基づいて社会の形成に主体的に参画できること」を「目標とする人間像」とし

て研究を行ってきたが、授業以外の時間においても、生徒が学校行事や部活動など様々な場面で、他者を尊重しながらも自分の意見を躊躇せず適切に伝え、集団としてまとまりながら活発に活動する姿が多く見られた。このような生徒の姿は、本研究を通して身に付けた資質・能力が日常の生活場面で汎用的に生かされていることをうかがわせるものである。こうした生徒の成長を見て、教育に携わる者としての大きな喜び感じることができた。

本研究は、地理歴史科、公民科だけでなく、学校全体にとっても大変有意義なものであった。研究は今年度で終わるが、来年度以降も学校全体で継続して授業改善に取り組み、生徒の力を育てていきたい。

参考文献等

- 文部科学省『高等学校学習指導要領』平成 21 年 3 月公示
- 文部科学省『私たちが拓く日本の未来 - 有権者として求められる力を身に付けるために』2015 年
- 北俊夫 (2012) 『なぜ子どもに社会科を学ばせるか』文溪堂
- 杉浦真理 (2013) 『シティズンシップ教育のすすめ』法律文化社
- 田中耕治 (2010) 『新しい評価のあり方を拓く―「目標に準拠した評価」のこれまでとこれから』日本標準
- 土屋武志 (2015) 『実践から学ぶ解釈型歴史学習 子どもが考える歴史学習へのアプローチ』梓出版社
- 土屋武志・下山忍 (編) (2011) 『学力を伸ばす 日本史授業デザイン 思考力・判断力・表現力の育て方』明治図書
- 富永健一 (1990) 『日本の近代化と社会変動』講談社学術文庫
- 西岡加名恵 (2008) 『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書出版
- 松下佳代 (2007) 『パフォーマンス評価―子どもの思考と表現を評価する』日本標準
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂